

2017年10月8日 於・東京都立美術館講堂

国際展から見る日本の現代美術

ヴェネチアビエンナーレ、カッセルドクメンタ展をふまえて、現代美術の新たな可能性を考える。

世界ではサロンが力を失っているが日本では公募展というサロンの力が昔ほどではないが残っている。東京展は反サロンのなサロンと言えらる。

サロンが力を失った後、まず民間の美術館、80年代以降は公立の美術館が数多く設立されたが、民間の美術館はバブル崩壊後閉鎖に追い込まれるものが続出した。現在はかつてほどサロン（公募展）から美術館への流れではない。国際展の最初がヴェネチアビエンナーレ。日本では諸事情でなかなかうまくいかなかったが2001年に横浜トリエンナーレが開催される。アジアでも国際展は増え、韓国の光州、中国などで開催。日本では都市の振興のみならず越後湯沢など過疎地の活性化にも貢献。

国際展では美術専用のスペースではない場所で作品が展示され祝祭性を伴う。

日本、中国、韓国が共同で行う「東アジア文化都市」の今年の日本開催都市は京都。京都市美術館が改装中で使えないため二条城で展示。二条城は釘などを打てず制約が大きかったが出品作家の全員が事前に二条城を視察するなど熱心で素晴らしい作品を展示した。

国際展を考える時、美術館という恵まれた場所から生活の場所である町へ出ていき、光や音などの様々な制約の中で新しい作品が生まれる。二条城での展示が良い例。

今年開催された二つの国際展。

ドクメンタ展 先鋭でラジカルでポリティカル。社会的メッセージが強い。今年のカッセルとアテネの二都市で同時開催。

ヴェネチアビエンナーレ 華麗で社交的で華やか。祝祭性が高い。

今年はこの二つの国際展の特徴が強く出た。

アートはアートである。一方でコミュニケーションツールでもある。国際展では育ってきた国、立場、歴史が違から完全なコミュニケーションは取れないが、素晴らしいアートを観て素晴らしいと感じ、シンパシーを感じる事はできる。

(文責・多田)